

認知症という日本語

はじめに

「痴呆症」に代って「認知症」という新語が広く使われるようになった。厚労省主導で公文書にも使われている。そうになってからの現在診療の現場で起こっていることをご紹介します。

患者が入院したりすると、急いで申し次ぐ。「脳梗塞よ」「心不全です」「高血圧」「肺癌です」「急性肺炎よ」……。何の不思議もない、当然の会話である。みな病気の名である。その名で呼ばれる疾患があり、それをもって患者の事態を的確に伝える。

ところがこの2、3年、（入院患者は）「認知よ」が現場でさかんに言われるようになった。

「認知」という語が「脳梗塞」や「心不全」と同列に扱われているのである。つまり、そこでは「認知」は疾患の一つになっている。

認知という用語

同じ用語は同じ内容でなければならない。言葉の大原則であって、さもなくば言葉が成り立たない。われわれがこれまで使っている用語“認知”は何を意味しているのだろうか？

簡潔に述べられている定義（Wikipedia）によると、“認知”とは人間などが外界にある対象を知覚した上で、それが何であるかを判断したり解釈したりする過程のこと。

これが“認知”だから用例もその意味で使用したものしかない。

例：ベンツといえば、「高級車」というイメージが多く、ブランド自体は“認知”していても・・

（ネット記事）

例：人間へのオキシトシン投与によって、比較的高水準のアルコール消費後に言語・“認知”機能への障害がどのような状態となるのかを調べることが可能になる・・（2015.2.24 ネットYahoo 記事）

例：“認知”度とは商品が、どれだけユーザーに知られているかを示す度合いをいう。（ネット記事）

例：前年度2位だった山梨県がトップに踊りでた理由として、同センターは、定期的なセミナーを開催したことによる“認知”度アップを理由に挙げたほか・・（ネット記事）

例：近江の“認知”度は高いが「それが滋賀だと“認知”されていない」（県企画調整課）

（2015.2.26Yahoo 記事）

例：指導者“認知”度1位は習主席（2015.2.18 ネット Nifty 記事）

法律用語としての用いられ方も、当然 この意味に基づいている。

例：わが子と“認知”する。“認知”届を提出した。

国も認知を上の意味で使っているのは当然でほかに使いようはない。

例：国のがん対策施策に影響し、さまざまな可能性を持つ「全国がん登録」だが、登録される側の国民の“認知”度は低い。

ところが、診療現場で盛んに飛び交う「認知」は、日本語として上の意味とは完全に異なり、病気の名である。「認知」が“認知”とは別に病気の名になった。同じ用語が2種類の異なる内容を持つ用語になった。上記の例の“認知”に、病気としての名を入れたらどういうことになるか！ 紛争がはじまりかねない？！

どうしてこういうことになったのだろう。

痴呆症のこと

痴呆とは、獲得されていた“認知”という機能が損なわれて、その上に築かれる広範複雑な高次機能が恒常的に失われてしまった状態を言う。脳炎・梗塞・外傷などで痴呆は急性突発して現れる。そういう突発事件でなくて、高齢者では高次機能の崩壊がゆっくりと慢性的に進行してついに痴呆に到達することは日常的に見られる。こちらのほうが圧倒的に多い。この段階の最後の痴呆を捉えて、われわれは痴呆症と呼んできた。

ところで近年、ついに痴呆に至る慢性的な障害が記憶の障害（物忘れ）から多くは始まることが認められるようになった。そこで、純医学的に痴呆症という概念が記憶障害から始まる長いスパンの疾患として拡張されたのである。

痴呆症という呼称

痴呆症はいわば、長いスパンの終末の事態だけを捉えていたことになる。いまや拡張された概念の疾患の呼称として痴呆症はその本態を適切に表しているかが問われることになる。

終末期にはまさに痴呆だが、それをもって、緩徐に進行する物忘れの事態をもふくむ疾患を代表させるのは適しているだろうか。より良い疾患呼称はないだろうか。これは純医学的な問題である。

「認知」症の登場

ところでそこへ持ってきて、呼称に関して医学的問題ではない他の要素が大きく割り込んできた。痴呆症は蔑視、差別というのである。癌も梗塞も蔑視、差別ではない。そういう疾患だから、そう呼称される。本来まず医学的問題として相応しい疾患呼称を求めることが先決課題であったものが、陰性感情を振り払うことを目的とした呼称を求めることにすり替わってしまった。そして「認知」症が登場した。

「認知」症の医学的退行

古来の日本語“認知”から、病気の名となった言葉の原則の逸脱は先述の通りである。

純医学的にも「認知」症は疾患呼称として退行している。認知は脳の高次機能の一つで、ほかにも高次機能はいろいろある。言語・思考・理解など。認知症が疾患としてあるのなら、言語症・思考症・理解症もあることになる。脳の高次機能でなく身体機能を見ても、睡眠・排便・月経などにおいても睡眠症・排便症・月経症があることになる。一瞥ナンセンスは明瞭であろう。下痢と便秘・過多月

経と無月経を区別しないで排便・月経に異常ありというだけでは疾患名として退行している。肺病というだけで肺炎も肺癌も区別せずに放置したのと同じことである。

痴呆症・認知症に替わるふさわしい疾患呼称

純医学的にこの疾患概念をあらわす呼称を考えねばならない。いくつかの候補をあげてもっとも良いものをえらぶことになる。

認知機能障害症（症候群）

認知障害症（症候群）

認知機能不全症（症候群）

認知不全症（症候群）

認知機能喪失症（症候群）

失認知機能症（症候群）

失認知症（症候群）

喪認知機能症（症候群）

喪認知症（症候群）

．．．．．

こうすれば、「認知よ」と呼び交わされることはなくなるだろう。本来の日本語観念は堅持される。